

平成30年度第2回きのくにコミュニティスクールの推進に係る研修会（紀南会場）

1. 日時 平成30年7月2日（月） 13:30～16:30
2. 場所 県立情報交流センターBig・U 研修室1
3. 参加者 学校教育関係者 学校運営協議会委員
市町村教育委員会きのくにコミュニティスクール担当者 等
合計 63名
4. 内容

◆実践発表

「きのくにコミュニティスクール導入1年目をふり返って～成果と課題～」

A 由良町立衣奈小学校 教頭 玉置 俊明 氏

- 学校運営協議会の起ち上げ
 - ・ 条例を制定し、条例に基づき設置
 - ・ 運営協議会委員の選任・委嘱（教育委員会が委嘱）
 - * 各区長（4人）、共育コーディネーター、PTA会長、学校評議員、衣奈会館長、学識経験者、校長、教頭
 - ・ 3つの機能
 - 基本方針の承認、意見具申、任用に対する意見
 - ・ ビジョンの共有
 - どんな子供を育てたいのか
 - 「優しい子」「考える子」「たくましい子」
 - ・ 子供の成長を支えるために
 - 「地域とともにある学校づくり・学校とともにある地域づくり」
- 成果
 - ・ 地域の方々の学校に対する思いがわかった
 - ・ 地域教材を活用できた
- 課題
 - ・ 委員選出時に、地域での共催行事を見据えた人選をする必要がある



B 串本町立串本西小学校 校長 浦 涉 氏

- 社会に開かれた教育課程の実現
 - ・ 人的、物的な資源の活用
 - ・ 他者と協働しながら課題を解決していく能力の育成
- 開校とコミュニティ・スクール発足の経緯
 - ・ 3小学校（和深、田並、有田）を統合→串本西小学校開校（H20年度）
 - ・ 開校とともに「共育コミュニティ活動」を開始
 - ・ 「地域から子供の声が消えてさみしい」という地域の声を受け、それぞれの地域で子供の声ができる機会をつくる
 - 共育コミュニティ活動を軸に運営協議会委員を選任する
- 成果
 - ・ 外部講師の授業により、子供たちの興味・関心が高まった
 - ・ 地域の方々に子供たちの姿・学校の取組の一面を知ってもらえた
 - ・ 学校に関わってくれた方が、さらに学校に協力的になった

○課題

- ・学校ボランティア・協力が固定化し、新たな人材の開拓が難しい
- ・学校開放期間の参観者数が増えていない

◆講演

『学校は地域の教室 授業は地域の文化
～地域とともにある学校づくりから～』

文部科学省CSマイスター
兵庫教育大学教職大学院 教授 小西 哲也 氏

○学校、保護者、地域住民の連携・協働（みんなが行ってみたい学校）
→コミュニティ・スクール

○学校におけるコミュニティ・スクール導入による成果（例：「奇跡の学校」）

- ・保健室の来室者が減少した
- ・生徒の心の安定が図られ、暴力行為の発生件数の減少につながった
- ・地域に貢献できる
- ・学校への批判や苦情が激減した
- ・学力が大幅に向上した（全国学力・学習状況調査結果）
- ・地域を愛する心を醸成し、地域の担い手を地域で育てることができるようになった



○地域（まち）づくりにつながる学校づくり

- ・地域教育力の向上、まちづくり、コミュニティづくりをとおして、大人も学校で学ぶようになる
- ・高校生は、地域のリーダーである
- ・教科横断型の開かれた共創の学び（例：「蛍を呼ぶ方程式」）が地域の方々とのつながりの中で進行する
- ・コミュニティ・スクール経営は校長の学校経営そのものであり、そのため、教育委員会の理解と地域の学校への支援力が必要である

5. 参加者の声（アンケートより）

- ・「大人の学びは子供の心を育てる」という言葉が印象に残った。（市町村教育委員会職員）
- ・地域の方々が学校、子供たちとともに学ぶことは、地域との協働のためにより取組だと思った。「おらが学校」となるように、コミュニティ・スクールを推進していきたい。（小中学校教職員）
- ・継続可能なコミュニティ・スクールについて、もっと考えてみたい。（小中学校教職員）
- ・財政面の支援をいかに工面できるかも運営協議会の課題である。（小中学校教職員）
- ・第1回学校運営協議会で、子供と地域の方々との交流が大切だという方向性を皆で見出した。本日の研修で具体的な取組のヒントを得ることができた。（小中学校教職員）

